

Title	高齢期社会化の新たな様相への探索的アプローチ：その方法と視点をめぐる考察
Sub Title	A heuristic approach to the new phases of elderly socialization : a consideration of method and perspective
Author	小倉, 康嗣(Ogura, Yasutsugu)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1996
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.43 (1996.), p.1- 10
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000043-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高齢期社会化の新たな様相への探索的アプローチ

——その方法と視点をめぐる考察——

A Heuristic Approach to the New Phases of Elderly Socialization

——A Consideration of Method and Perspective——

小 倉 康 嗣*

Yasutsugu Ogura

The purpose of this article is, first, to recognize necessity of heuristic approach to the new phases of elderly socialization, and next, to show the method and perspective of this approach.

This study begins by recognizing the socio-historical conditions surrounding elderly people in Japan—*conditions of increasing diversity in life styles and a breakdown of longstanding norms*—, that demand a heuristic approach to the new phases of elderly socialization. This article examines the concept of “socialization” in the light of this situation, and reviews previous studies from this standpoint. This methodological stance attempts to *apprehend the subjective side of an individual undergoing elderly socialization through the process of interpretation*. The *life stories* of these individuals are introduced as data to be investigated. It has been proven that *the interactionist perspective* and *the viewing of elderly people from the perspective of the individual (personal community)* are effective analytical perspectives.

1. 問題の所在：高齢期社会化の新たな様相への探索的アプローチの必要性

日本におけるこんにちの高齢者世代¹⁾は、《変動社会における境界性喪失状況》にあるといえる。すなわち、人生50年時代から80年時代への推移に伴うライフサイクルの変化、イエ規範の弱化をはじめとする家族規範・家族形態の変化、そして伝統的な年齢規範の揺らぎ等を含む生活様式の多様化・多元化、といった社会変化を、わずか自らの一世代という急激さで経験している。したがって、自分たちの親世代のシルバーライフは見本にならず（高齢期への予期的社会化の困難性）、かといって高齢期における一般化された生活規範もモデルもない（高齢期における社会化の内容の不明確性）。長期化し、残余的な位置づけで過ごすことは困難になりつつある高齢期をいかに生きるか、時代の「先駆者」として模索している状況にあるのである²⁾。

しかしながら、このような歴史的社会的状況にあるか

らこそ、新しい時代にふさわしいシルバーライフを、その人なりに開拓しつつある高齢者も現れ出ていることを見逃してはならない。日本のシルバーライフも着実に変容しつつあるのであり、このような高齢者たちの存在を発見することによって、大衆長寿時代における新たなライフスタイルの可能性を見出ししていくことは、超高齢社会に向かいつつある現代日本社会に課せられた急務な課題なのである。つまり、ここにおいて、既存の社会に専ら受け身的に適應するという課題を越えたという意味での《現代的課題としての高齢期社会化》というテーマが探求するに値するものとして浮上してくる。そして、そこから《高齢期社会化の新たな様相を発掘する》という探索的アプローチの必要性が認識されてくることになるわけである³⁾。

本稿は、以上のような文脈から高齢期社会化の新たな様相を発掘するために有効な方法と視点とはいかなるものなのか、それを主だった先行研究を批判的に検討しつつ見出ししていくことを目的とした論考である⁴⁾。

* 社会学研究科社会学専攻博士課程（エイジングの社会学）

2. 高齢期社会化論の現代的背景: いかなる文脈から「社会化」を捉えるのか

まず、本稿では「社会化」という概念をいかなる文脈で捉えるのか、高齢期社会化論の現代的背景とともに確認しておきたい。

周知のとおり、「社会化」という概念自体は、社会学史において古くから用いられてきた概念であり、極めて多義的な概念であるが、1940年代のアメリカ社会学において「個人の社会化」を意味する方向へとその定着が進み、現代社会学においては、主としてパーソナリティの社会的形成や、社会的文脈におけるパーソナリティの発達について分析するためのキー概念として用いられている(青井, 1976:5; 渡辺, 1980:24; 三沢, 1985:46)。しかし、その方向性における意味内容は、様々に変化してきている。従来は、パーソンズの構造機能分析を理論的支柱とし、専ら社会システムの機能的要件の充足に関心の焦点を置くものであった。そこでは「未成年者」の社会化が主要な研究テーマとなり、社会的価値規範の内面化に焦点を置き、個人がある特定の社会の成員としての諸資質を身につける過程、すなわち、「未成年者」がその社会における「成年者」としての諸資質を身につけるまでの過程を意味する概念として主として議論されたのである。しかしその後、社会変動の加速化と、それともなう価値観や生活様式の多元化・多様化、中高年期の拡大というライフサイクルの変化といった現代社会の現実が、「ライフロングプロセスとして人間の発達を捉えること」(渡辺, 1980:25)を要請し、「社会化」を生涯にわたるものとして捉えることが必要になってきたわけである⁵⁾。そしてそこではまた、特に成人期以後における個人の主体的な選択性や自己形成的な側面、すなわち、社会によって割り当てられた価値規範を内面化したり、役割を学習するだけではなく、それを基礎としながらも、それ以上に新しい役割を形成したり、価値を創造したりする側面を捉えていくことが要請されているわけである⁶⁾。《現代的課題としての高齢期社会化》というテーマは、この文脈上に位置づけられる。そして、本稿が、この文脈から「社会化」という概念を捉えていることはいうまでもない。

3. 高齢期社会化に関する先行研究

わが国における研究に限っていえば、「高齢期社会化」というテーマに関し、その重要性を喚起したり、分析枠組について試論的に考察したものはいくつかあるものの

(青井, 1976; 副田, 1981; 西下, 1982; 三沢・南, 1989 など)、「高齢期社会化論」として、現代日本の高齢者たちに特筆すべき歴史的社会的背景にまで配慮したうえで、体系的にあるいは実証的に論考しているものは意外となく、その理論的実証的研究の多くはアメリカにおいて展開されているといつてよい。

そこで、主としてアメリカにおいて展開されている社会老年学理論を援用することによって「高齢期社会化論」の輪郭を把握し、それと同時に、これまでの日本における高齢者の生活研究の動向の特色を押さえながら、現代日本における高齢期社会化の新たな様相を捉えていくための方法と視点を考察するうえでの手掛かりとした。

3.1 活動理論と離脱理論

活動理論(activity theory)と離脱理論(disengagement theory)は、アメリカ社会老年学の領域において構築された代表的な理論である。この両理論は、高齢期における適応ないしはsuccessful aging⁷⁾に関する理論として構築されたものであるが、主に役割理論の考えに基づいて行われ、社会化研究の発想と基本的に同じであり(副田, 1981:205)、高齢期における再社会化(re-socialization)に関する理論とみなすことができよう。

前者の活動理論は、様々な研究者によって提唱・支持された(Rose, 1961; Cavan, 1962; Lemon, Bengtson & Peterson, 1972 など)。その要旨は、①生物学上および健康上の不可避的な変化を除いて、高齢者は、中年の人びとと本質的に同じ心理的および社会的な欲求を持っている、②高齢期に特徴的な社会的相互作用の減少は、社会の側が高齢者から撤退(withdrawal)していく結果生じるものであり、ほとんどの高齢者たちの要望に反して進むものである、③したがって、望ましい(optimally)老化とは、可能な限り中年期のときの活動を保持すること、そして、退職等で活動を放棄せざるを得ない場合は、その代わりの活動を見つけ出すことによって活動性を維持することである、というものである(Havighurst, Neugarten & Tobin, 1963:419)。また、この理論において、「活動」とは、基本的に、社会的行為、すなわち社会的役割の遂行を意味しており、活動水準の測定は、就労活動や、友人との交際など、それぞれへの参加程度をきくことによって各役割行為の得点を単純加算する方法によってなされている(松村, 1978:62)。

つまり、この理論が基本的に主張していることは、中年ないし壮年期において担っていた社会的役割を可能な限り遂行し続け、そこからの引退によって社会的役割を

放棄せざるを得ないときは、その機能的代替物としての代わりの活動を見つけ出し、それを遂行していくことが高齡期における適応として望ましいということなのである。

一方、離脱理論は、カミングとヘンリーによって提唱された。彼らは、老化は高齡者と社会システムの他の成員との相互作用が減少していく過程であり、高齡者と社会がお互いに撤退 (withdrawal) し合うこと (離脱) は、不可避的であるとする。すなわち、高齡者は自分自身への傾倒 (preoccupation) とともに社会からの離脱を自ら欲し、社会の側は彼/彼女が離脱しやすいような制度を用意し、様々な社会的相互作用から彼/彼女を解放する。このプロセスが完了すると、個人と社会は新しい均衡状態に到達するという (Cumming & Henry, 1961: 14-6)。

この理論は、アメリカ・カンサス市の都市部において、1955年から6カ月毎5回にわたって構造化面接を行うといったパネル調査の結果に基づいたものであり、インフォーマントは、50歳から70歳までの、身体的に健康で経済的に心配のない人びとが層化無作為抽出によって選ばれた (ibid.: 27-9)。また、離脱については、「役割総数 (role count)」, 「相互作用指標 (interaction index)」, 「社会生活空間尺度 (social life-space measure)」という3つの指標によって測定しており、役割総数は家族や親族、友人、労働者といった役割の数を得点化したもの、相互作用指標は他者との相互作用に費やした1日の時間量に基づく指標、社会生活空間尺度は一定期間において関与した、他者との相互作用の数をカウントしたものである (ibid.: 38-51)。

カミングとヘンリーは、離脱のプロセスに関してはパーソナリティや生活状況、文化的要因などによって影響を受けるとしながらも、離脱そのものは普遍的で不可避なものであるとしており、批判もそこに向けられた。また、相互作用に質的な差異を多少なりとも認めているが、その測定の段階ではあまり考慮されていない。総じて、この理論のトーンには、「社会と個人とが相互に離れあうことによって新たな均衡がつけられるといった予定調和的楽天主義、ないしパーソンズ流の現状肯定イデオロギーが見出される」(柚井, 1981: 124) わけである。

つまり、社会の規準を受動的に受け入れることによって適応状態を見出そうとする離脱理論の理論構成は、既存の社会を所与とし、その社会の側から一方向的に高齡期の生活のありようを規定しているという点では、活動理論と変わりはないのである⁸⁾。

3.2 ロソーの高齡期社会化論

活動理論と離脱理論が一種の仮説提示的なものであったのに対し、ロソーの研究は、「高齡期社会化論」として、体系的に考察されたものである。

ロソーによると、アメリカ社会における高齡者は、近代産業社会への変動に伴う種々の制度的な影響を被った結果、「地位を低められ、不公平なステレオタイプで見られ、社会的な機会から排斥され、役割を喪失し、晩年に深刻な役割の曖昧さに直面し、若さの自己イメージを通して自己評価を維持しようと悪戦苦闘する」(Rosow, 1974: 83: 15) のだという。すなわち、高齡期への移行は、若い時期の役割移行と極めて対照的で、①通過儀礼が欠如しており、人びとは知らず知らずのうちに、漠然と「老人」にさせられる、②重要な社会的役割から遠ざけられ、社会的利得よりもむしろ体系的な社会的喪失をもたらす、③高齡期に入ってから新たな生活規準について人びとを訓練するような文化的条件が存在せず、役割の不連続性がみられる。つまり、高齡者のための意味ある規範がほとんど存在しない。したがって、高齡期への社会化はかなり困難であり、多くの高齡者のあいだで、自己概念と社会的定義のあいだに鋭い矛盾が生じているという (ibid.: 30-8)。

このようなロソーの指摘は、特に高度経済成長期以降の日本の高齡者が置かれてきた社会構造上の位置づけを説明するうえでも、かなりの程度有効であるといえよう。ただし、日本においては、少なくとも1950年代の前半くらいまでは、イエ制度の影響によって、高齡者の地位の低下に歯止めがかけられ、ある程度明確な役割規範も存在していたのであって、そういった過去を引きずっている現代日本の高齡期社会化の状況は、アメリカの状況よりももっと先鋭的であるとさえいえよう。また、ロソーは、高齡期の欲求充足につながる個人のアイデンティティの源泉を、社会構造上明確に位置づけられている地位に基づいた「制度的役割 (institutional role)」への参加に専ら求めており (Rosow, 1985: 68-76)、その限りで既存の社会システムを所与としたうえで、そこに焦点を置いた分析であるといえよう。

3.3 日本における研究の動向

日本においては、社会学の立場からの高齡者の生活研究は、専ら家族社会学の一領域として、高齡者の家族生活の研究として行われてきた。しかも、その歴史は比較的浅く、研究が始まったのは、戦後の家族変動が激しくなり、高齡者の家族内での地位が不安定になりつつあった1950年代からである⁹⁾ (湯沢, 1970: 101-4; 那須他,

1972: 353)。

日本における高齢者の家族生活に関する研究について、戦後から 1970 年代末までのものを、諸文献目録を通して詳細に整理した樽川典子は、日本における高齢者の家族生活に関する研究の動向に共通する特徴として、①高齢者扶養論あるいは「扶養」概念を用いる論議が優勢である、②家族・親族の関係でいえば、同世代内より世代間の特に子から高齢者へのそれに向けられる関心が強い、③家族研究の接近法という観点に立てば、高齢期の家族を、高齢者個人の側よりも制度・集団の側から捉えがちである、という 3 点を挙げている (樽川, 1984: 162-3)。

樽川によると、これらの特徴は、わが国において 1970 年代に入ってから盛んになりだした、アメリカの家族社会学の伝統に由来する家族研究を導入した高齢者研究にも当然ある。例えば、高齢者の家族役割を中心とした構造機能分析は、直系家族的世帯に焦点を当てるものが多く、夫婦間の役割構造よりも世代間のそれを重視して検討される傾向にある。また、家族ネットワーク論も、高齢者扶養論で欠けやすい親子関係の説明を補うかたちで援用される傾向が強く、さらに、相互作用の質についても、世代間の援助・接触頻度に関するものにとどまり、趣味の活動を共にする社交関係や、友人関係が親族網に及ぼす影響といった研究はごくまれである (同論文: 155-8, 162-3)。

1980 年代に入ってから、実証研究が除々に増え、研究関心の多様化が進んでいくが、総体的には、樽川の指摘した特徴が維持されていったとみてよい。すなわち、子どもとの同居率の推移や将来予測、地域差を扱った研究、同・別居の規定要因と同居意識に関する研究など、子どもとの同・別居に関する研究が圧倒的に多いということが、そのことを裏付けている (古谷野・横川, 1993: 196)。

3.4 批判的総括

以上、概観した先行研究の特徴について、本稿の目的に照らして批判的に総括するならば、以下の二点を指摘することができよう。

第一に、高齢者を社会の客体としてみる傾向が強く、高齢期を社会の側からの一方向的な視点で喪失と衰退という文脈でしか捉えられていないということが指摘できる。すなわち、活動理論と離脱理論においては、活動 (社会的役割) を外的な基準で量的に捉え、その量を測定することに主眼を置いており、その質あるいは意味合いの違いはあまり考慮されていない。そこでは基本的に、活

動あるいは離脱というカテゴリーに入るかどうかということが問題とされている。また、ロソーについては、社会構造上明確に位置づけられた制度的役割があるかないかという視点で高齢者のアイデンティティの問題や幸福感を断定してしまっている。つまり、彼らは、アメリカにおける従来の業績的社会システムを所与としたうえで、活動水準ないし制度的役割の有無という外的事象と、高齢期における欲求充足という問題とを短絡的に結び付けてしまっており、両者間の関係における質的な側面ないし過程の側面は解明されていない。そこには、近代産業社会において多くの制度的な役割を担う壮年 (特に男性の) に中心的価値を置いた社会化観とでもいえるべきものがあり、初期における社会化概念と同様に、(既存の業績的社会システムを所与とした) 社会の側に専ら焦点を置いており、新たな歴史的社会的状況に対処しようとする高齢者個人の主体的・創造的側面は、射程に入っていない。

第二に、特に日本における高齢者研究に特徴的なこととして、高齢期における社会化の場が、家族集団内に限定されて捉えられてきたことが指摘できる。しかも、老親扶養の観点が強く、援助を媒介とした高齢者と子どもとの関係にその焦点が置かれていたということが指摘できよう。そこでは、基本的に、家族集団のなかで一方向的に援助され保護される。他律的で受け身的な高齢者像が想定されていたわけである。

もちろん、双方の点とも、その理論が提示されたり、研究がなされた当時の歴史的社会的状況からすれば、一定の有効性を持ったものであったことは否定できない。しかし、少なくとも時代拘束的なものであったということとはできるであろう。

4. 高齢期社会化の新たな様相を捉えて いくための方法と視点

前章における先行研究の批判的総括から、既存の方法と視点による枠組みとは異なる枠組みを設定する必要性が認識されたといえよう。すなわち、《変動社会における境界性喪失状況》という高齢期社会化の歴史的社会的背景を前提とするならば、従来の先行研究において想定されていた時代拘束的な高齢期社会化状況を相対化したうえで、社会システムの変動状況を射程に入れた方法と視点を設定することが要請されてくるわけである。それはいかなるものなのか。まずは、創造的行為主体たる人間個人のもつ推進力をぬきにしては、社会変動を十分社会学的に明らかにすることは困難であると主張する中野卓

の以下の言葉に注目したい。

「歴史的・社会的な大小の状況が通時的に変転しつつ連鎖してきたそのなかで人は成長し、その人なりの主体性を作り上げてきたのです。それゆえ人は自分の置かれた環境とその変化を自分の当面する状況として自分なりに受け留め、それに対処して、多少ともその状況を新たな状況へと変えてきたのです。大状況を変えないまでも小状況を変え、積極的に状況を変えていくことが困難であったとしても、彼の見出した状況の、受けとめ方を変えてみることもまでは可能であって、少なくとも、そのようにして人は切りぬけ生き抜いていくことができたのです……社会と個人が相互規定するというのは、その個人の生涯を通じてのことであり、社会が個人に状況として受けとめられることは、個人が社会を規定する最も身近な最初の局面であり、そのような状況の変転に個人は主体的、能動的に参与しうるのであります。」(中野, 1984: 7-8)

この言説から指摘できることは、「状況の変転に主体的に参与しうる個人」をその解釈過程から捉えていくための方法と視点の必要性である。なぜなら、高齡期社会化の新たな様相は、中野が言うような、社会形成の主体者（であると当事者が意識する・しないにかかわらず）として社会事象を認識しようとする人間の営為、つまり、内在化された社会過程である「自己との相互作用 (self-interaction)」の過程をも含めた、個人と社会の相互交渉過程の集積のうえに現出してくるものであるといえるからである。しかもそこで指摘されていることは、『変動社会における境界性喪失状況』という高齡期社会化の歴史的社会的背景からするならば、より強調されなければならない側面である。「社会は常に変化するものであり、その変化は一方で当該社会の構造的必然に規定され、他方で日々生活する人々（社会の構成員）の価値判断に規定される」が、境界性喪失状況における「社会規範の規定力の低下という変化は、既存の社会規範に対する価値剥奪という価値判断の結果とみることができ」(北村, 1990: 36)、その変化の様相は、社会の構成員である個人個人の状況規定、すなわち解釈過程の中に現れ出てくるものであるからである。つまり、「フィールドとしての個人」(佐藤, 1994: 15) からの逆照射である。

したがって、ここでは、『高齡期社会化状況における個人の主体的側面を、その解釈過程から捉える』ことの必要性をまず確認しておきたい。

4.1 方法：追究されるべきデータはいかなるものか

それでは、『高齡期社会化状況における個人の主体的側面を、その解釈過程から捉える』ために、追求されるべきデータ、採用されるべき方法はいかなるものであろうか。それは、『変動社会における境界性喪失状況』に置かれている個々の高齡者の経験的世界から出発することであろう。このことは、上野千鶴子の次の言葉に的確に説明されている。

『『客観的』と思われていた現実がゆらぎ、見たこともない異様な現実がたちあらわれるときには、それを捉える新しい方法、新しい言葉がなければならない。その現実を記述する言葉は、どこにあるか？ただその新しい現実赶赴ばよい。現実自身に語らせばよい。当事者が手探りで自分の現実を表現しようとするその言葉そのもののなかに、新しい現実を記述する新しい言葉は存在する。必要なのはただ耳を傾けることだ。それに『客観的』な観察をおしつけたとたん、そのリアリティはこわれる。『客観性』とは、古い現実を記述する古い物語の別名にすぎない。』(上野, 1994: 232)

そこで、クローズアップされてくるのが、インタビューによって得られた質的データ、なかでも『ライフストーリー』である。このライフストーリーを含めたいわゆる生活記録が、「調査者が行為主体のパースペクティブにアクセスできる」もの、すなわち、「生活史法が社会的行為者の主観的見方を明らかにする方法、あるいは社会過程の主観的側面を重視した方法だという点」については共通の理解が得られているといえる(桜井, 1993a: 90)。そして、その中でもライフストーリーには、「日常生活のイメージや出来事を、研究者の枠組みでなくて生活者自身がいかに分節化しているかへの関心」が強い(桜井, 1993b: 1457-8)。さらに、ライフストーリーは、「過去において獲得した『意味体系』から秩序づけられた」リアリティを再構成したり、正当化したり、過去における重要な他者を選択したりといった解釈過程も射程に入ってくるものである(有末, 1988: 242-4)。生活史が豊富に蓄積されている高齡期における社会化を考えると、こういった自らの過去の生活経験を解釈する過程も、その内在的な社会化過程である「自己との相互作用」¹⁰⁾に大きく影響していることを見逃してはならない。そういった点からも、ライフストーリーは、高齡期社会化状況における個人の主体的側面を、その解釈過程から捉えるのに有効なデータであるといえよう。したがって、ここで追究されるべきデータは、『高齡期社会化

状況にスポットを当てた高齢者個人のライフストーリー」となるわけである。

ただし、ここで強調しておきたいのは、ここでこのライフストーリーを挙げたのは、あくまでどういう性質のデータを収集するのかという次元において採るべき方法として提示したもの（当然のことながら、先に引用した上野の言説も同様の文脈において引用したもの）であり、そのデータを分析する段階で、研究者の分析視点を導入することとは矛盾しないということである。船津衛の言葉を借りれば、「研究者の分析視点は、行為者の日常的見地と全く同一である必要はない。行為者の日常的見地を、研究者は主体的に解釈し、再規定したものを、自己の『研究者の見地』にしてよいのであり、またそうすべきである。もちろん、その『解釈』は、全く恣意的なものではなく、社会構造上に位置づけられた行為者と研究者とのダイナミックな相互作用過程の中から生み出されてくるもの」（船津、1976:279）であるからである¹¹⁾。

本稿の考察では、高齢期社会化の新たな様相を発掘するという研究者の主体的な営みが前提とされている。したがって、『高齢期社会化状況にスポットを当てた個人のライフストーリーを、高齢期社会化の新たな様相を発掘するという見地から分析する』という方法が採用されることになる。

4.2 分析の視点

では、『高齢期社会化状況にスポットを当てた個人のライフストーリーを、高齢期社会化の新たな様相を発掘するという見地から分析する』にしても、いかなる視点から分析していくべきかが次なる問題となる。前章で検討した先行研究に対する指摘に依拠しながら、高齢期社会化の〈内容〉、〈場〉、〈プロセス〉といった諸側面をめぐって考察してみたい。

まず第一に、これまでの高齢期社会化に関する理論は、高齢者を社会の客体としてみることにより、高齢期を社会の側からの一方向的な視点で、喪失と衰退という文脈でしか捉えていないということが指摘できた。それはつまり、高齢期社会化の〈プロセス〉において役割の喪失や獲得がもたらす帰結（すなわち高齢期社会化の〈内容〉）についての見方が「構造論的視点」に偏っており、決定論的であるということである。

ジョージが指摘するように、高齢期における役割移行ないしは社会化状況は、大別して「構造論的視点 (structural perspective)」と「相互作用論的視点 (interactionist perspective)」の二つの視点から捉えられるといえる。すなわち、構造論的視点は、専ら社会構造上明確に

位置づけられた、つまり、社会的に割り当てられた地位と結び付いた「フォーマルな役割¹²⁾と社会的アイデンティティに焦点を当て、高齢期がフォーマルな役割の喪失、ゆえに社会的アイデンティティの低下によって特徴づけられる」とする。一方、相互作用論的視点は、「かなり広く、諸個人が意味のある個人的アイデンティティを作り出すために現実を解釈する方法を考察する」。つまり、社会的に割り当てられた地位と関係なく、「個人の独創性と交渉の過程を通して生まれる」、「個人的な趣味、嗜好に適合しうるインフォーマルな役割」にも注目することで、高齢期におけるフォーマルな役割の喪失にもかかわらず、インフォーマルな役割の形成や、インフォーマルな役割へのコミットメントの増大によって、アイデンティティ感覚が維持されることの可能性を示唆するのである¹³⁾ (George, 1980:86:7-10; 1983:239-40; 1987:90:236)。

この相互作用論的視点は、社会化分析の中核的概念である「役割」がより広い文脈で捉えられているという点でその特徴を指摘することができる。この視点の代表的論者といえるターナーは、「役割」を次のように定義している。

「役割とは、意味のある単位を構成するものと考えられ、社会における特定の地位を占有する者（例えば、医者や父親）、対人関係においてインフォーマルに定義された位置を占有する者（例えば、指導者や調停者）、あるいは社会における特定の価値に同一化される者（例えば、正直者や愛国者）にとってふさわしいとみなされる行動様式の集積である。」 (Turner, 1956:316)

この定義における1つ目のカテゴリーが、ここにいるところのフォーマルな役割であり、2つ目と3つ目のカテゴリーが、インフォーマルな役割である。このインフォーマルな役割の2つのカテゴリーは、フォーマルな役割からの引退によって特徴づけられる高齢期において生じつつある、新たな現実と可能性を捉えていくのに有効な概念である。なぜなら、このインフォーマルな役割の2つのカテゴリーへの社会化には、個人の創発性が特に発揮されるという点で役割変容や役割形成の側面を内包しているといえるからである。

このように、相互作用論的視点は、社会化過程における個人の主体的側面そしてその解釈過程を重視したものであり、高齢期社会化の新たな様相を発掘していくために有効な視点であるといえよう。もちろん、この相互作用論的視点と、先にあげた構造論的視点とは相補的なも

のであり、その意味で、現代日本の高齡期社会化の背景として本稿の前提的な状況認識となっている《変動社会における境界性喪失状況》は、構造論的な特徴であるといえるが、それを前提にすればこそ、高齡期社会化の新たな様相を発掘していく試みにおいては、この《相互作用論的視点》がより強調されなければならないのである。

なお、このような視点に立つとき、生活史の蓄積が豊富な高齡期における社会化のプロセスには、高齡者が直面している現在状況を反映した「状況的自己」の側面だけではなく、「自らの過去におけるさまざまな個人的・文化的象徴を体系化することを繰り返す、それによって意味のある、一貫した自己意識を創造し」(Kaufman, 1986:88:17)、現在を生きるための活力を得る、という「生活史的自己」の側面が多分に含まれることにも配慮したい¹⁴⁾。なぜなら、いま・ここで進行する、特定のインターパーソナルな交渉における経験だけでなく、「自己との相互作用」の過程のなかで、自らの過去における経験(あるいは、過去における重要な他者)との交渉によって現在自分が生きている世界における位置づけを確認し、自らのアイデンティティ感覚を形成している側面も、特に高齡期における社会化の内部過程を考えると、顕著なものとして認められるであろうからである¹⁵⁾。

以上ここで提示した視点は、高齡期社会化の〈内容〉そして〈プロセス〉に関する新たな様相を捉えていくために有効と考えられる視点である。

第二に、特に日本におけるこれまでの研究において、高齡期における社会化の〈場〉が、家族集団内に限定されていたということを指摘することができた。つまり、老親扶養の観点から、高齡者を専ら扶養される存在と見立て、高齡者の社会関係について、主に子やその家族との同・別居に焦点が当てられてきたのであった。このことは、安達正嗣(1995:94)も指摘しているように、夫婦のみで暮らす高齡者やひとりぐらし高齡者に対し、一面的に「棄老」や「孤独な老人」というイメージを付与してきたこととも無関係ではない。これでは自らの主体的な選択によって、家族との多様な関係や、家族関係以外の諸関係をつくりだしつつある高齡者の新たな現状を捉えることは困難となる。古谷野巨と横山博子は、我が国における高齡者の社会関係に関する研究が、「家族生活の研究、とりわけ同・別居を中心として展開されてきた」とし、高齡者と家族との関係をも「ダイアド(一対の個人の関係)に分解し、同居家族以外の他者との関係

と同じ指標で評価していく」必要性を指摘しているし(古谷野・横山, 1993:198-9)、野々山久也は、高齡者たちの家族形態の多様化を指摘し、「多様な家族形態がライフスタイルとして選択できる可能性」が出現しつつあることを示唆している(野々山, 1989:8-9)。高齡期社会化の新たな様相を発掘するためには、彼/彼女らを取り結んでいる多様な関係性の創出過程とその意味づけを《「個としての高齡者」という視点》から捉える必要がある。

そこで参考になるのが、前田信彦の提唱する「パーソナル・コミュニティ」の考え方である。前田は、都市居住高齡者の事例調査から、高齡者の社会関係が、「従来の伝統的な地縁や血縁の拘束性が強い地域限定的なものではなく、交通手段や電話などを利用して空間的に離れた親族や友人とも接触性を保ち」、高齡者個人の生活ニーズに合わせて、「広範囲にわたって選択的に社会関係が維持されている」ことを指摘し、このような『孤立化』とも『集団化』とも表現できないような、選択的ネットワークで形成されたコミュニティを「パーソナル・コミュニティ」と呼ぶ(前田, 1995:42-3)。このパーソナル・コミュニティという考え方は、特定の規範や集団内地位に結び付けられた役割に受動的に規定されるのではなく、個人の選択性を重視し、「相互につくりあうネットワークを媒介として、既成の社会を流動化し変動させている社会形成の主体者」としての個人の営みを重視しようとする、社会的ネットワーク論の視点(森岡, 1995:4-6)に基づいている。

したがって、高齡期社会化の〈場〉に関する新たな様相を捉えていくのには、この《パーソナル・コミュニティ》という視点が有効であると考えるが、ここで忘れてはならないのは、高齡者をめぐる社会関係の形態の変容と同時に、それぞれの関係性の意味合いも変容しつつある現状を捉えることの必要性である。そこで、パーソナル・コミュニティ形成の〈プロセス〉と、それぞれの関係性創出をめぐっての解釈過程を理解していくことが必要となってくるわけである。したがって必然的に、《「個としての高齡者」すなわち、パーソナル・コミュニティという視点》に、先の《相互作用論的視点》が組み込まれることになる。

5. おわりに

《変動社会における境界性喪失状況》という歴史的社会的状況のなかで、高齡者の生活世界は変容し、多様化・複雑化しつつある。そこには新たな高齡者文化の萌

芽も見受けられるであろう。したがって、このような過程的で重層的な様相を的確に発見・把握することが要請されている。そして、この要請に応えるためには、これまで所与とされてきたもの（社会的事実・変数）を相対化し、個人と社会をダイナミックで過程的な関係として捉える方法的態度が必要となってくる。本稿の方法と視点の考察において確認された《高齢期社会化状況における個人の主体的側面を、その解釈過程から捉える》という基本的方向性、追求されるべきデータとしての《ライフストーリー》、そして《相互作用論的視点》《「個としての高齢者」という視点》といった分析視点は、このような状況認識から導出されたものである。

今後の作業として最も必要とされているのは、新たな現実を感受する記述探索型の研究を着実に蓄積しながら、「プロセスとしての理論」(Glaser & Strauss, 1967=96:43)を構築していくことであろう。そういった作業の積み重ねのうえに、大衆長寿時代の新たな生きかたの可能性も見出されてくるのである¹⁶⁾。

注

- 1) 本稿で「こんにちの高齢者世代」、「現代日本の高齢者」などというとき、いわゆる前期高齢者（現在、60歳代後半から70歳代前半の高齢者）を想定している。
- 2) 北村 薫は、「個人の生涯にわたる生活のしかたについての基準（社会規範）の規定力が低下した社会状況」を「境界性喪失状況」とし、現代の日本社会のあらゆる局面において見られる現象であると指摘している（北村、1990:35-6）。これに関して、筆者は、拙稿（小倉、1996:7-24）において、①ライフサイクルの変化と引退の様相、②高齢期社会化の場として重要な位置を占めてきた家族集団をめぐる変化、③高齢期における役割形成の基礎となる社会保障の整備とその周辺の動向といった諸側面の様相を、マクロ的なデータに基づきつつ、現代日本の高齢者世代のライフコースに即したかたちで概観した。その結果、彼/彼女たちが、これら3つの諸側面にわたって、わずかに自らの一世代のあいだで急激な社会変化を経験しており、多面的で重層的な日本社会の現状状況の経験の次元に加えて、ライフコース的な経験の次元からしても（つまり、二重の意味で）、顕著な境界性喪失状況にあることが明らかにされ、現代日本の高齢期社会化の背景は《変動社会における境界性喪失状況》という表現で特徴づけられることが確認された。本稿における論考は、このような状況認識を前提としている。
- 3) もちろん、そこには、新しい社会的価値を形成する主体として高齢者を位置づけ、新たな高齢者像や高齢者文化の創造につながる研究が必要であるという筆者の価値認識が介在している。
- 4) なお、本稿では、高齢者あるいは高齢期を役割移行の視点から位置づけている。すなわち、高齢期を、退職による職業的役割からの離脱、子どもとの離家・独立による親役割からの離脱など、社会的地位に基づいた諸役割から離脱していく時期であると位置づけ、そうした社会的諸役割から離脱した後の人生をいかに生きるかというライフスタイルの文脈に限定して高齢期社会化の論考を行う。
- 5) このような問題認識にもとづく社会化研究は、まずアメリカにおいて盛んになり、ライフサイクルを通じての社会化について論じたブリム (Brim, 1966) や、生涯社会化 (life-long socialization) という用語を用いて社会変動と加齢をむすびつけて論じたライリー (Riley, 1969; 1982 など) らによっておしすすめられた。日本においても、同様な問題認識から社会化の諸次元における再考を促した青井和夫 (1976) や、社会化をライフロングプロセスとして捉えることを提唱した渡辺秀樹 (1980)、社会化とライフコースの関係について論じた北村 薫 (1990) など、さまざまな試みがなされている。また、ライフコースの研究ならびにライフヒストリー研究への関心の高まりや、心理学における生涯発達心理学への関心の高まりも同様の文脈上にあるといえよう。
- 6) この点は、それまでの、パーソンズら (Parsons & Bales, 1956=70) に代表される、構造機能主義的アプローチへの偏りへの批判というかたちで、1970年代頃から問題とされるようになり、ブリムは、個人が「自分の役割行為を変えたり改良しようとする自己創発的企て」にそれまでの社会化分析が注意を払ってこなかったことを問題にし、「自己創発的社会化 (self-initiated socialization)」という概念に提示してその先陣を切った (Brim, 1968:189-92)。日本においても、青井和夫は「社会化の理論の中にどうして個人の主体性・機能性・創造性・革新性を取り入れるか」(青井, 1976:5)と問題提起し、柴野昌山 (1977; 1978; 1989) や渡辺秀樹 (1975; 1980; 1981) などが社会化論に個人の主体性や能動性を取り入れるためのアプローチを理論的に展開している。それは概ね、構造機能主義的アプローチとシンボリック相互作用論的アプローチを相互補完的に統合していくという方向である。
- 7) アメリカ社会老年学において、1960年代初め頃から使われた言葉。「幸福な老い」あるいは「上手な年の取り方」と訳されることが多い (嵯峨座, 1993:4; 柴田他編, 1993:211)。
- 8) この点、実際、活動理論と離脱理論の妥当性をめぐって、アメリカで10年あまりにわたる論争が理論的側面からも実証的側面からも繰り広げられたが、高齢期における個人の適応や生活満足度は、「活動」や「離脱」といった客観的な状況因子によって直接規定されるのではなく、他の種々の媒介変数が介入してくるのであって、その媒介変数としては特に個人が状況をどのように認知しているかが重要であることや、老化過程の様相は、社会の抱く文化的価値や経済構造によって違ってくるなどが指摘され、結局のところ、この論争の帰結は、老化過程のパターンは多様であるといった常識的なものにとどまっている (袖井, 1981:121-2; 直井, 1993:1038)。
- 9) もちろん、戦前にも穂積陳重『隠居論』(1915年、有斐閣)のような研究もあり、その他にも、隠居習俗の民俗学的研究などもあるが、ここでは触れない。
- 10) 当然のことながら、この内在的な社会化過程である「自己との相互作用」も、高齢期社会化の新たな様相形成の一端を担っている。
- 11) 実際、生活史研究の領域においても、生活史（資料）のコンテクストづけの仕方として、「調査者もしくは研究者は、可能な限り被調査者本人の言葉や言いまわしを生かしながら本人自身の一生を浮きばりにするために、編集というかたちで生活史資料の再構成に関与」する「編集志向」のほかに、「調査者もしくは研究者が明示的なかたちで生活史資料もしくは〈作品としての生活史〉の解釈・分析にのりだしていく」「解釈・分析志向」と呼べるタイプがあることが、水野節夫によって指摘されている (水野, 1986:170-1)。

- 12) 前章でみた、ロソーの研究にあった「制度的役割」がこれにあたる。
 - 13) 周知のとおり、ここで言う「構造論的視点/相互作用論的視点」は、ウィルソン (Wilson, 1970) による「規範的パラダイム/解釈的パラダイム」という研究パラダイムの類別に対応している。
 - 14) 高齢者のアイデンティティのありかを考察したカウフマンは、過去から意味を引き出し、体験を解釈する主体としての自己 (self) の存在を一貫して強調している (Kaufman, 1986=88)。なお、「状況的自己」及び「生活史的自己」という言葉は、草津 攻 (1978) のアイデンティティに関する論考による。
 - 15) この社会化の内部過程における、自己の時間的側面は、これまでの社会化研究においても、あまり触れられてこなかった側面である。
 - 16) 本稿において提示した方法と視点による具体的な分析は、拙稿 (小倉, 1996: 48-132) において行っている。
- 引用文献
- 安達正嗣 1995 「高齢期家族の社会学へのアプローチ」 兵庫県家庭問題研究所編『家族研究』2: 91-100
- 青井和夫 1976 「社会化再考」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第31集: 5-16
- 有末 賢 1988 「生活史と『生の記録』研究—ライフヒストリーの解釈をめぐる—」『法学研究』61巻1号: 233-62
- Blumer, H. 1969 *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Prentice-Hall (後藤将之訳『シンボリック相互作用論—パースペクティブと方法』勁草書房, 1991)
- Brim, O. G. Jr. 1968 "Adult Socialization", in Clausen, J. A. (ed.), *Socialization and Society*, Little, Brown and Company: 182-226
- & Wheeler, S. 1966 *Socialization after Childhood: Two Essays*, John Wiley & Sons
- Cavan, R. S. 1962 "Self and Role in Adjustment during Old Age", in Rose, A. M. (ed) *Human Behavior and Social Process: an Interactionist Approach*, Houghton and Mifflin: 526-36
- Cumming, E. & Henry, W. E. 1961 *Growing Old: The Process of Disengagement*, Basic Books
- George, L. K. 1980 *Role Transitions in Later Life*, Wadsworth (西下彰俊・山本孝史訳『老後—そのときあなたは』思索社, 1986)
- 1983 "Socialization, Roles, and Identity in Later Life", in *Research in Sociology of Education and Socialization*, Vol. 4, JAI Press Inc.: 233-63
- 1987 "Socialization", in Maddox, G. L. (ed.) *The Encyclopedia of Aging*, Springer Publishing Co. Inc. (海野和之訳『社会化』エイジング大事典刊行委員会監訳『エイジング大事典』早稲田大学出版部: 234-6, 1990)
- Glaser, B. & Strauss, A. 1967 *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Aldine Publishing Co. (後藤 隆・大出春江・水野節夫『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論を生み出すか』新曜社, 1996)
- 船津 衛 1976 『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣
- Havighurst, R. J., Neugarten, B. L., & Tobin, S. S. 1963 "Disengagement, Personality and Life Satisfaction in the Later Years", in Hansen, P. F. (ed.) *Age with a Future*, Munksgaard: 419-25
- Kaufman, S. R. 1986 *The Ageless Self: Sources of Meaning in Late Life*, University of Wisconsin Press (幾島幸子訳『エイジレス・セルフ—老いの自己発見』筑摩書房, 1988)
- 北村 薫 1990 「ライフコース分析と社会化」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第46集: 35-51
- 古谷野 亘・横山博子 1993 「老年期の家族」柴田 博他編『老年学入門—学際的アプローチ』川島書店: 195-9
- 草津 攻 1978 「アイデンティティの社会学」『思想』No. 653 岩波書店: 108-42
- Lemon, B. W., Bengtson, V. L., & Peterson, J. A. 1972 "An Exploration of the Activity Theory of Aging", *Journal of Gerontology*, 27: 511-23
- 前田信彦 1995 「都市居住高齢者のパーソナル・コミュニティ」東京市政調査会『都市問題』86巻9号: 41-52
- 松村健生 1978 「定年退職と社会的適応—活動理論と離脱理論の再検討」社会保障研究所編『季刊社会保障研究』Vol. 14: 56-69
- 水野節夫 1986 「生活史研究とその多様な展開」『ライブラリ社会学』10 社会学の歴史的展開 サイエンス社: 147-208
- 三沢謙一 1985 「社会化研究の課題」同志社大学人文学会編『評論・社会科学』第26号: 46-66
- 南 育広 1989 「老年期の生活」三沢謙一他『現代人のライフコース』ミネルヴァ書房: 187-234
- 森岡清志 1995 「都市社会とパーソナルネットワーク—パーソナルネットワーク論の成果と課題」東京市政調査会『都市問題』86巻9号: 3-15
- 中野 卓 1984 「個人の社会的調査研究について」日本社会学会編『社会学評論』No. 125: 2-12
- 直井道子 1992 「老化の社会的アプローチ」折茂 肇 (編集代表)『新老年学』東京大学出版会: 1032: 42
- 那須宗一他 (座談会) 1972 「老人家族研究の回顧と課題」那須宗一・増田光吉編『講座日本の老人 3 老人と家族の社会学』埴内出版: 352-75
- 西下彰俊 1982 「『老年期社会化』への役割論的アプローチ」東京都立大学社会学研究会編『社会学論考』第3号: 53-74
- 野々山久也 1989 「いま家族に何が起っているのか—問題提起」家族社会学セミナー編『家族社会学研究』創刊号: 6-14
- 小倉康嗣 1996 「変容する日本のシルバーライフと高齢期社会化—有料老人ホームを終の棲処とする高齢者の事例調査から」(1995年度慶応義塾大学大学院社会学研究科修士論文)
- Parsons, T. & Bales, R. F. 1956 *Family: Socialization and Interaction Process*, Routledge and Kegan Paul (橋爪貞雄他訳『家族—核家族と子どもの社会化』黎明書房, 1981)
- Riley, M. W. et al. 1969 "Socialization for the Middle and Later Years", in Goslin, D. (ed.) *Handbook of Socialization Theory and Research*, Rand McNally: 951-82
- 1982 "Aging and Social Change", in Reiley, M. W., Abeles, R. P. & Teitelbaum, M. S., *Aging from Birth to Death Vol. II: Sociotemporal Perspectives*, Westview Press: 11-26
- Rose, A. M. 1961 "Mental Health of Normal Older Persons", *Geriatrics*, Vol. 16: 459-64
- Rosow, I. 1974 *Socialization to Old Age*, University of California Press (嵯峨座晴夫監訳『高齢者の社会学』早稲田大学出版部, 1983)
- 1985 "Status and Role Change through the Life Cycle", in Binstock, R. H. & Shanas, E. (eds.), *Handbook of Aging and the Social Sciences: second edition*, Van Nostrand and Reinhold Company: 62-93
- 桜井 厚 1993a 「方法論としての生活史」松平 誠・中嶋 邦編『講座生活学 3 生活史』光生館: 90-120
- 1993b 「ライフ・ストーリー」森岡清美・塩原 勉・本間康平編『新社会学辞典』有斐閣: 1457-8
- 佐藤健二 1994 「ライフヒストリー研究の位相」中野 卓・桜井 厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂: 13-41

- 柴野昌山 1977 「社会化論の再検討—主体性形成過程の考察」
日本社会学会編『社会学評論』No. 107: 19-34
- 1978 「人間形成の構造—主体的社会化論の展開」麻
生 誠・柴野昌山編『変革期の人間形成—社会学的ア
プローチ』アカデミア出版会: 7-34
- 編 1989 『しつけの社会学』世界思想社
- 柴田 博他編 1993 『老年学入門—学際的アプローチ』川島書
店
- 副田あけみ 1981 「老年期のパーソナリティ」副田義也編『講座
社会老年学Ⅰ・老年世代論』垣内出版: 195-245
- 袖井孝子 1981 「社会老年学の理論と定年退職」副田義也編『講
座社会老年学Ⅰ・老年世代論』垣内出版: 102-40
- 樽川典子 1984 「老年期の家族役割と夫婦関係」副田義也編『日
本文化と老年世代』中央法規出版: 149-94
- Turner, R. H. 1956 "Role-Taking, Role Standpoint, and Ref-
erence-Group Behavior", *The American Journal of Sociol-*
ogy Vol. LXI No. 4, The University of Chicago Press: 316-
28
- 上野千鶴子 1994 『近代家族の成立と終焉』岩波書店
- 湯沢擁彦 1970 「家族における老人 (1)—日本の場合」山室周
平・姫岡 勲編『現代家族の社会学—成果と課題』培風館:
101-6
- 渡辺秀樹 1975 「家族における社会化過程について—構造機能
分析による理論モデル構築の試み」日本社会学会編『社会学
評論』No. 101: 36-52
- 1980 「社会化とライフサイクル」青井和夫・庄司興
吉編『家族と地域の社会学』東京大学出版会: 25-50
- 1981 「個人・役割・社会—役割概念の統合をめざし
て」日本社会学会編『社会学評論』No. 686: 98-121
- Wilson, T. P. 1970 "Normative and Interpretive Paradigm
in Sociology", in Douglas, J. D. (ed.) *Understanding Every-
day Life*, Aldine Publishing Co.